



生活様式が大きく変わったJAや組合員の皆さまに贈る日本農業新聞の読みどころ集です。「この1週間を振り返る」ため週刊でお届けします。

同日の自民党農林同会議に農水省が見し方針を示し、了承された。交付対象水田は、行でも水張りできない農地は対象外だが、1ルを再徹底する。の上で、22/26年産5年間で一度も水張りのなかった農地は交付対象から外すとした。

政府・自民党は米の転作助成の柱となる水田活用の直接支払交付金の見直し内容を固めました。今後5年で麦・大豆などの作付けを含め、一度も水張りしなかった水田は交付対象から除外。産地交付金における飼料用米などで、複数年契約した際の加算措置は、既存契約分だけ10a当たり6,000円を配分し、2022年産からの新規契約分は対象外とします。(12/1付1面)

政府・自民党は30日、米の転作助成の柱となる水田活用の直接支払交付金の見直し内容を固めた。今後5年で麦・大豆などの作付けを含め、一度も水張りしなかった水田は交付対象から除外する。産地交付金における飼料用米などで複数年契約した際の加算措置は、既存契約分だけ10a当たり6,000円を配分し、2022年産からの新規契約分は対象外とする。

水田活用の直接支払交付金の見直し内容

- ◆交付対象  
今後5年間に一度も水張りが行われない水田は除外
- ◆産地交付金  
・飼料用米などでの複数年契約で、20年産、21年産からの契約分は6000円配分(22年産からの契約分は対象外)  
・輸出用米で複数年契約した際に1万円配分  
・作付け転換を上げた際に1万5000円配分する措置は廃止
- ◆多年生牧草への戦略作物助成  
はし  
播種から収穫まで行う年は3万5000円、収穫だけの年は1万円
- ◆畑地化する際の助成  
高収益作物は17万5000円、その他の作物は10万5000円

※金額は10a当たりの助成額 (農水省の資料を基に作成)

配分する。輸出用米で複数年契約した場合に同一万円を助成する措置を新設する。国が助成単価を決める戦略作物助成では、多年生牧草で収穫だけを行う年は同一万円とし、現行の同3万5000円から減額する。当初は助成自体をなくす方針だった。

# 今後5年水張りなければ対象外 水田交付金見直し決定

政府・自民

日本農業新聞の読みどころ

週刊ダイジェスト

2021年11/27/12/3付

今週の記念日  
★12月8日  
「有機農業の日」  
一般社団法人次代の農と食をつくる会が制定。有機農業やオーガニックに関する認知度を拡大するとともに、その理解の増進を図るのが目的。日付は民間で市民立法として起草され、議員立法として国会で審議された「有機農業の推進に関する法律」が成立した2006年12月8日から。

<日本記念日協会から>

日本で開発されたブドウ「シャインマスカット」が、中国で2020年に5万3,000ha栽培されていたことが、農林水産・食品産業技術振興協会の調査で明らかになりました。日本の栽培面積の30倍以上。イチゴ「紅ほっぺ」も中国で4万4,000haと、日本のイチゴ栽培面積の8.4倍に相当します。改正種苗法施行前に海外に持ち出され、すでに産地化が進んでいるのが実態です。(11/28付1面)

## 流出優良品種 中国で産地化

日本品種の中国での栽培面積	
品種	栽培面積
シャインマスカット	5.3万ha(2020年) →日本(1625ha、18年)の30倍以上
紅ほっぺ	4.4万ha(19年) →日本のイチゴ栽培面積(5200ha、18年)の8.4倍

(JATAFFの資料を基に作成)

## シャインマスカット 日本の30倍生産

日本で開発されたブドウ「シャインマスカット」が、中国で2020年に5万3,000ha栽培されていたことが、農林水産・食品産業技術振興協会(JATAFF)の調査で分かった。日本の栽培面積の30倍以上に上る。イチゴ「紅ほっぺ」(中国での栽培面積も19年に4万4,000ha)も中国で、日本の全てへの販売も含め、正規録の出願時に、栽培地を国内や特定の都道府県に限定する条件を付けた。登録済みや出願中の品種も、同省に9月末までに届け出れば、海外への持ち出し制限を利用条件に追加できる。改正法では、海外流出を防ぐため、品種登録が科される。

# 農で副業 変わる「公共」

## 人手不足「リンゴ王国」の挑戦



リンゴを収穫する岩下さん。「公務員と収穫労働者の二足のわらじを履いています」と言った（青森県弘前市で「釜江紗英写す」）

弘前市では今秋から公務員がリンゴ農家で兼業を始めました。これまで公務員は法律上、兼業や副業を禁じられていませんが、業務への支障や守秘義務違反などへの懸念から、事実上の禁止状態でした。近年、人口減に伴う労働力不足を背景に、民間企業だけでなく公務員の「多様で柔軟な働き方」が推奨されるようになりました。弘前市では「公共」という観点からは兼業・副業の在り方を見直しました。(11/29付1面)

小雨が降る中、初めてリンゴの収穫に携わる男性が、恐る恐る両手で実を下に引いていた。枝はしなるが、実は離れなかった。農家の福田耕生さん(35)が「軸に人さし指を当て、こうひねるんです。片手で大丈夫」と手本を見せた。軸とは実と枝を結ぶところ。男性は「なるほど」と嘆息し「落さないように緊張してしまつて」とはにかんだ。津軽は名産、岩木山の中腹が紅に染まる10月中旬、東麓に広がる青森県弘前市でリンゴの収穫が本格化した。男性は市文化振興課に勤める地方公務員、岩下朝光さん(45)。業務やボランティアではない、休日利用のアルバイトだ。同市では今秋から職員30人がリンゴ農家で兼業を始めた。福田さんが「一人手が欲しかったから助かります」と感謝し、岩

# 「協同らしさ」1000人議論

## ICAソウル大会開幕

開会のあいさつをするIALCOICA会長(1日、韓国・ソウルで)



【ソウル・大高摩彩】第33回世界協同組合大会が1日、韓国・ソウルで始まった。国際協同組合同盟(ICA)が主催し、世界97カ国から1000人を超える協同組合代表らが参加。「協同組合のアイデンティティーを深める」をテーマに、分科会での事例報告など

を議論する。大会は3日まで、協同組合を通じて意見を交わす。3日まで。大会は9年ぶり。協同組合連携機構(ICA)の栗本昭特

第33回世界協同組合大会が韓国・ソウルで開かれました。国際協同組合同盟(ICA)が主催し、世界97カ国から協同組合代表らが参加。「協同組合のアイデンティティーを深める」をテーマに事例報告などが行われました。(12/2付1面)

熊本県で11月、トマトなどナス科の植物の害虫「トマトキバガ」が国内で初めて確認されました。海外では「トマトのエボラ出血熱」とも呼ばれ世界的に警戒されています。幼虫の食害による品質低下が問題となっています。(12/1付12面)

甚大被害、まずは警戒を

## 世界で急拡大 トマトキバガ

熊本県で11月、トマトなどナス科の植物の害虫「トマトキバガ」が国内で初めて確認された。海外では「トマトのエボラ出血熱」とも呼ばれるほどの甚大な被害をもたらした。世界的に警戒される害虫だ。国内でのまん延を防ぐには、発生兆候を見逃さず、早期の発見と防除が求められる。



食害80カ国で「トマトキバガ」は発生頻度が高く、少ないながらも被害

熊本で先月 国内初確認

日本農業新聞 東北支所 次長(編集担当) 原尻大志

今年のスポーツ界では、ピッチャーとバッターの2刀流のメジャーリーガー、大谷翔平選手の活躍に沸いた1年だったが、引退したスター選手も印象に残っている。松坂大輔さんと齋藤佑樹さんだ。野球選手としての終わりを告げる引退試合。全盛期の球威はなくなり、なんとも言えない寂しさを感じた。人生、山あり谷あり。栄光と挫折の人生模様を感じた。ファンを楽しませてくれたことに感謝を伝え、お疲れ様と言いたい。

